

調査研究部会報告

少年院におけるビブリオバトル・デモンストレーションを通じた司書養成の取り組み

ー沖縄少年院で受講生は何を学んだか？

山口 真也

1. はじめに

筆者が籍を置く沖縄国際大学は、通信課程を除くと、沖縄県内で唯一の司書課程設置大学であり、1990年代半ばから、県内の図書館へ司書有資格者を送り出している。

本レポートは、2018年度後期に実施した、司書課程受講生による沖縄少年院(糸満市)でのビブリオバトルのデモンストレーションの取り組みをまとめつつ、授業終了時に提出を課した感想レポートをもとに、受講生が何を学んだのか、何を感じたのか、従来の司書課程の授業では得られない教育的効果を明らかにしようと試みるものである。

「ビブリオバトル」とは、公式サイト¹の説明によると、「みんなで集まって5分間でお気に入りの本を紹介し、読みたくなった本(=チャンプ本)を投票で決定する、スポーツのような書評会」であり、全国各地の小中高校の授業や図書館・書店のイベント、一般企業の研修・勉強会などにも広く活用されている。また、「人を通して本を知る 本を通して人を知る」というキャッチコピーもつけられており、本の紹介を通じた「コミュニケーションゲーム」という機能も持つとされている¹。本稿では、こうしたビブリオバトルの持つ機能が少年院という空間において司書養成にどのような効果

をもたらすのか、どうこともあわせて考えてみたい。

2. プロジェクトに至る過程・目的

沖縄少年院と沖縄国際大学司書課程のかかわりは、本誌『沖縄県図書館協会誌』(2017年12月刊行)に掲載された「少年院から見た図書館」という記事から始まる²。

本記事では、罪を犯した子どもたちが少年院内で利用できる施設として「図書室」が設けられていること、そして、沖縄県立図書館の「一括貸出」制度を利用して、子どもたちの矯正教育に必要な本をそろえていることなどが紹介されていた。

筆者は司書課程の授業を担当するとともに、籍を置く日本文化学科の専門科目(選択科目)を活用することによって、現在の本学の司書課程のカリキュラムでは実現が難しい実習的要素を取り入れたいと考えている³。具体的には、筆者が担当する「図書館情報学特別演習Ⅰ」「図書館情報学特別演習Ⅱ」という科目を1年間実施し、「アドバンスド科目」と位置づけ、日本文化学科の学生だけでなく、司書課程受講生全体へ受講を呼びかけ、2015年度から、実習的要素を多く含む授業を実施してきた。受講対象は司書課程の履修をほぼ完了している3年生後期以

¹ 「知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト」
<http://www.bibliobattle.jp/>, 2020.12.29 アクセス

² 竹下哲郎「少年院から見た図書館」『沖縄県図書館

協会誌』第21号, 2017.12

³ 沖縄国際大学司書課程では図書館法施行規則に定められた乙群科目(選択科目)の「図書館実習」「図書館総合演習」は開講されていない。

降の学生である。

2018年度後期からスタートする「図書館情報学特別演習Ⅰ」を構想する上で、筆者は上記の記事の著者である竹下哲郎氏(法務教官)に連絡を取り、司書課程の受講生とともに少年院を訪問し、図書室を見学させていただくとともに、読書が矯正教育の支えになっていることをレクチャーしてほしい、と依頼することとした。

こうした筆者の依頼自体は快くお受けいただけることになり、後期開始前の9月に一度、沖縄少年院を訪問することになったのだが、そこで出会った首席専門官の松田正巳先生が、「ビブリオバトル」を少年院でも実施したいという要望をもともと持っておられたこと、そして、筆者が県内の図書館関係者向けの研修や利用者向けのイベントで何度かビブリオバトルのコーディネートを行った経験があったことから⁴、話がはずみ、せっかくの機会なので、受講生たちに、図書室の見学だけでなく、院生の前で、ビブリオバトルのデモンストレーションを行ってほしい、という依頼を受けることとなった。

筆者はこれまで経験してきたビブリオバトルのコーディネートでは、一般の利用者から参加者(バトラー)を募ることがあるのだが、積極的に広報をしても、参加人数が足りない場合、または未経験者ばかりではスムーズに運営できない懸念もあることから、司書課程の学生に参加してほしいという依頼を受けることがたびたびあった。

ビブリオバトルについては、筆者が2019年度まで担当していた「図書館サービス概論」という

司書課程の授業で全国大会などのビデオを見せて紹介したり、授業内でグループを組んで練習をしたりする体験的な学習の機会も設けたことがあった⁵。



(司書課程の授業内でのビブリオバトル体験)

しかしながら、もともと司書課程の受講生の中には一人で本を読むのが好きなタイプの学生もおり、人前でのプレゼンテーションが求められるビブリオバトルに苦手意識をもつ学生も一定数存在するように思われる。従って、授業でこうした学外へのイベントへの参加を呼びかけてもなかなか学生たちから参加したいと自発的、意欲的に手が上がることは少ないのが現実である。

その上さらに、今回の取り組みでは、少年院での院生や教官を目の前にしたビブリオバトルであるため、受講生が積極的・意欲的に取り組めるようにするには授業の目的・意義を授業登録前にしっかりと学生たちに伝える必要がある。そこで筆者は、後期の授業登録前に開催された3

⁴ 筆者が沖縄県内で2018年12月までにコーディネートしたビブリオバトルは次の通り。

2015年10月31日「平成27年度沖縄県立図書館セミナー」、2016年6月27日「宮古地区司書教諭・図書館主任・図書館司書研修会」、2016年8月22日「八重山地区司書教諭・図書館主任等研修会」、2016年11月4日「沖縄県立図書館第6回図書館まつり」、2016年11月23日「宜野湾市民図書館ぎのわん教育の日特別企画」、2017年11月4日「沖縄県立図書館第7回図書館まつり」、2017年11月25日「宜野湾市民図書館・ぎのわん教育の日関連イベント」、2018年8月1日「平成30年度浦

添市立学校図書館司書研修会」、2018年9月5日「平成30年度浦添市立図書館・仲西中学校図書委員会研修会」、2018年10月27日「平成30年度子ども読書指導員スキルアップ講座」、2018年11月10日「沖縄市立図書館・図書館セミナー」、2018年12月1日「平成30年度浦添市立図書館ビブリオバトル&2018うらそえYA文芸賞表彰式」

⁵ 「図書館司書資格課程のご紹介 ビブリオバトルの体験授業を行いました!」

<https://www.facebook.com/okiunichibun/posts/361954633928618>, 2016.7.15 公開

年生向けのオリエンテーションに参加し、この取り組みが司書職を目指すうえで大きな意味があることを積極的に伝えるようにした。また、授業の初回(仮登録期間)において、知る自由・知る権利という基本的人権を保障する上で、図書館が第一に考えないといけないことは、「平等なサービス」ではなく、「公正なサービス」であること、つまり、誰に対しても等しく(同等の・同量の)サービスを行うことではなく、利用者 1 人 1 人の特性や置かれた環境に思いを寄せるためのまなざしをもち、いろいろな事情で読書ができない、情報を得られない立場の人たちへ図書館から手を差し伸べることが、本来の「公共」の意味であり、図書館に求められる公正なサービスだということ、そして、今回の少年院でのビブリオバトルのデモンストレーションをそのことを実感的に理解できる取り組みとして位置付けたい、ということを書いて伝えるようにした。その結果、例年の受講者数を大きく上回る 16 名が正式に受講登録をし、この取り組みに参加することとなった。

3. 事前学習の様子

司書課程の中では、利用者サービスの 1 つとして「アウトリーチサービス」⁶という、様々な事情から図書館への来館がかなわない人たちへ手を差し伸べる活動を学ぶ機会がある。また、専門図書館の一種として、矯正機関である刑務所内の図書室について知る機会もある。しかし、定められたカリキュラム内での学習時間は限られているため、学生たちは少年院という矯正機関についての知識を十分に持っておらず、筆者自身も専門外であるため、前提知識を得ることが難しい。そこで、ビブリオバトルのデモンストレーションを 1 か月後に控えた 2018 年 11 月 30 日、沖縄国際大学図書館学習室Ⅰに、沖縄少年院の竹下先生をお招きし、矯正教育のプログラムや院内での読書活動についてのレクチャーを受けることとした。



(沖縄少年院・矯正教育についての事前学習)

竹下先生のご講話の中では、少年院法が改正され、読書の機会を院内の子どもたちに与えていくことが法的な義務になっていること、沖縄少年院では図書室を設置して「読書指導」という授業を設けていること、図書室では子どもたちの矯正教育に役立つ本を幅広く集めていること、犯罪被害者が書いた本などを読むことで得られる気づきが矯正教育にとって大きな意味があること、図書室以外の本を読みたいときは「自弁図書」という制度で外部から購入することや保護者等からの差入れを受けることもできること、沖縄県立図書館と連携して多様な資料を集めるとともに、院生が県立図書館で軽作業を行うことも矯正プログラムの 1 つになっていることなどをご説明いただいた。

竹下先生の講話の後には質問の時間をとっていただいた。学生たちからは「神戸連続児童殺傷事件の加害者の元少年が書いたとされる『絶歌』が自弁図書で請求されたらどうしますか?」「自弁図書の貸し借りは院内では可能ですか?」「図書室にはマンガやライトノベルなどはありますか?」といった質問が寄せられ、竹下先生からは 1 つ 1 つ丁寧に回答をいただいた。

この事前学習を通して、学生たちは、これまで遠い存在と思っていた「少年院」という場所が図

⁶ 「施設入所者、低所得者、非識字者、民族的少数者など、これまでの図書館サービスが及ばなかった人々に対して、サービスを上げていく活動」(日本図書館情報学会

編『図書館用語辞典』第 4 版, 丸善出版, 2013, p.1-2)

書館ととても近いところにあることを実感するとともに、様々な事情から少年院に入り、社会復帰を目指して努力している子どもたちへ図書館から積極的に「手を伸ばす」(アウトリーチ)ことの重要性にも気づかされたように思う。また、12月末のビブリオバトルのデモンストレーションに向けて、少年院の機能と図書館との接点について深く考えさせられる一日にもなった⁷。

4. ビブリオバトルのデモンストレーション

事前学習を終えた後、受講生16名の中から当日のデモンストレーションに参加する7名の代表を選ぶために、12月14日の授業では受講生全員が参加してのビブリオバトルの予選会を行うこととした。



(ビブリオバトル・デモンストレーションの予選会)

ビブリオバトルというものは、本来は、自分が読んで面白いと思った本を、特にテーマに縛られずに自由に選んで紹介するゲームだが、今回のデモンストレーションは、図書館のアウトリーチサービスの学習の一環として行うという目的もあるため、実施先の施設の特徴=矯正教育を行う施設という面も考慮して、次のようなテーマで本を選ぶよう、事前学習で伺った矯正教育の目的や沖縄少年院の子どもたちの様子をふまえて、事前に学生たちに伝えることとした。

① 中学生の頃、または高校生の頃に読んで、

心が動かされた本

- ② 苦しい時、落ち込んでいる時、辛い時に読むと、心が癒されるような本
- ③ 少年院法に「娯楽」という目的での書籍の閲覧も可能とあるので、つらい現実・不幸な状況を追体験するのではなく、息抜きになるような面白い本
- ④ 将来の進路について役に立った本(仕事について幅広く知ることができる本、進学したいと思った本、自分自身が司書になりたいと思った本など)
- ⑤ 院の子どもたちが抱えやすい問題に寄り添えるような本(親子関係、貧困、離婚、いじめなど)

なお、今回のデモンストレーションは教育的な場で行うものではあるが、「ビブリオバトル」であることには変わりはないため、未読の本を紹介するのではなく、「自分が読んで面白いと思った本」から選ぶという基本ルールについても厳守するように改めて伝えることとした。

沖縄少年院でのビブリオバトルのデモンストレーションは、法務教官の當間和久先生のコーディネートの下で、2018年12月25日に開催された。体調不良により欠席した2名を除く受講生14名とともに沖縄少年院を訪問し、「特別授業」という形で、約1時間30分のビブリオバトル大会を行った。筆者はバトル実施前の20分ほどの時間をいただいてビブリオバトルの簡単なルール説明を行い、大会ではバトルの司会進行役を務めた。バトラーとして参加しない学生は、聴衆として投票に参加するとともに、投票用紙の配布、投票結果の集計、PC操作などのサポートも行った。

今回のデモンストレーションで受講生たちが院生に紹介した本は次のとおりである。書誌情報の後の丸数字は、事前に学生たちに伝えたカテゴリを示しており、書誌情報は大会での紹介

⁷ 「図書館司書課程通信⑦ アドバンスド科目で少年院での図書室・読書活動について学びました」

<https://www.okiu.ac.jp/gakubu/sogobunka/nihon/blog/28839>, 2018.12.6 公開

順に並べている。

- ・ 有川浩『フリーター、家を買う。』(幻冬舎)____④
- ・ 川村元気『世界から猫が消えたらなら』(小学館)____②
- ・ 青木和雄『ハッピーバースデー 命かがやく瞬間』(金の星社)____①⑤
- ・ サイモン・シン『フェルマーの最終定理』(新潮社)____④
- ・ チャールズ・ディケンズ『クリスマス・キャロル』(新潮社)____⑤
- ・ 水野敬也『雨の日も、晴れ男』(文芸春秋社)____②
- ・ 上橋菜穂子『明日は、いづこの空の下』(講談社)____③

当日のプレゼンテーションの後に行われた質疑応答では、どの本にも院生からも(教官の先生方からも)たくさんの質問が寄せられた。会場にいた全員による投票の結果、『雨の日も、晴れ男』がチャンプ本に選ばれ、この本を含む7冊と、筆者が最初の説明のところで、「真面目な本だけじゃなくてどんな本でもいいので自分が好きな本を選びましょう」と呼びかけた際に、例として紹介した、『ドラ・カルトドラえもん通の本』(小学館)を合わせた合計8冊の本を図書室の蔵書としてプレゼントさせていただいた。

デモンストレーション終了後は、少年院内の図書室などの施設を見学させていただいた。蔵書冊数は多くはないものの、傷んだ本を手にとって、何度も何度も読まれた跡のある本が多いことに気づかされる受講生たちの様子もあった。

デモンストレーション当日には、開始前に学生たちが待機していた控え室に首席専門官の松田先生にお越しいただき、激励の言葉をいただくとともに、少年院の子どもたちと読書のかかわりについて短い時間であったがレクチャーをいただく時間も作っていただいた。そこで松田先生がおっしゃっていた、「矯正教育の可能性はいろん

なところにある」という言葉どおり、「ビブリオバトル」と読書がもつ力を実感する一日になった。



(デモンストレーション後の記念撮影
・沖縄少年院前にて)

5. 受講生たちは何を学んだのか？

ビブリオバトルのデモンストレーションが行われた後、1週間ほどの期間をとって、学生たちには今回の取り組みを振り返るための感想レポートを提出してもらった。感想の中から今回の取り組みの目的に深くかかわるものをいくつか紹介したい。

教室で行われる普段の司書課程の授業では実感できないような、深い学びを受講生が経験したと思われる箇所には下線を入れている。

「今回、少年院でビブリオバトルをしてビブリオバトルのテーマだった本を通して人を知る、ということがどういう事なのか身をもって実感することが出来ました。自分はバトラーとして参加したのですが、質問をしたときに手を挙げて反応してくれたときはとてもうれしくて、緊張がほぐれました。また、事前に思っていたような子どもたちなのではないのかもしれないと思いました。私は人前で発表することが本当に苦手で、ビブリオバトルも苦手だったのですが、この活動を通して多くのことが学べたと思います。特に人を知るという活動は、自分がビブリオバトルに参加しないとわからない感覚だと感じました。正直に書くと、少年院の子どもたちにはマイナスの先入観がありました。しか

し、帰る頃にはそれもまったく無くなっていて、短時間でこれだけ人の意識を変えることができるビブリオバトルという活動は本当にすごいことだと思います。少年院でのこうした活動は、もっと多くの人に知られてもいいのではないかと思います。司書になってからも、こうした活動は続けていきたいと思いました」

「当日、私はバトラーとして参加できなかったので、少し残念に思っていました。でも終わった後に、バトラーとして参加した友人たちと感想を話し合ってみると、バトラーとは違う視点で、後ろから全体を見ることができたことは大きな収穫でした。私が感じたことは、少年院の子どもたちの間く姿勢のすばらしさです。それは、自分が経験してきた中学校・高校時代の生徒のどれとも当てはまりません。しっかりとした姿勢で話す人に目、耳、意識を向けていることが見て取れました。これまで山口先生のお誘いもあって何度かビブリオバトルのイベントのお手伝いをしてきましたが、どのイベントよりも、質問が多く、その質問の内容もしっかりしていました。これは、しっかりとプレゼンテーションを聞いていた人にしかできないことだと思います。自分のために話してくれるお兄さん、お姉さんの気持ちにこたえようとしてくれていたのだと思います」

「図書館学の授業で「アウトリーチサービス」のことは学習していましたが、その時、実際にはやっているところが少ない、という話も聞いていました。今回、そのサービスの体験の1つとして、少年院へ行くという体験をしましたが、やってみると、それほど難しいことはなかったように感じました。もちろん、このイベントが実現するまでに少年院の先生方にはいろいろとご準備いただいたのだと思いますが、それでも最初から難しい、忙しい、無理、といった、できない理由を考えて、サービスに消極的になるのではなく、信念をもって、できる方法を考えることが司書になった時に大切なことだと感じま

した」

「授業登録時に見たシラバスでは、少年院の図書室を見学に行く、という情報を得ていたのですが、授業開始後に、院の生徒さんの前でビブリオバトルをする、と話を聞いて驚きました。少年院に対する自分自身の知識不足もあり、正直に書く戸惑いもありました。親に話をしたら、そんなあぶないところに行ってはダメ、とも言われました。中学校の頃に接していた、いわゆる「不良」のこどもたちと読書というものがあまり結びつかず、読書にもビブリオバトルにも関心がないのでは？、と思ったりして、どんな反応があるのか、授業日がくるのがすこし怖かったです。しかし、事前学習で竹下先生に少年院の役割を教えていただき、また、当日も松田先生、當間先生から子どもたちが本が好きな様子を聞くことができて、自分のものの見方、考え方がまだまだ狭く、幼いことに気づかされました。そして、実際にビブリオバトルが始まってみると、最後まで姿勢を崩さず、静かに真剣に話を聞いてくれたことにもとても感動しました。バトラーにも積極的に質問をしていて、ビブリオバトルを本当に楽しみにしてくれていたんだなあ、と思いました。後ろのほうの生徒たちはもしかするとまだ院に入って間もない方なのではないかと思いました。今回の体験が、本を読むことに興味を持ち、学ぶことに繋がればいいなと思いました」

「本が好きで司書を目指しましたが、勉強も難しく、時々、本が好きなら司書ではなく、利用者として図書館と付き合うだけで十分では？、という気持ちになることもありました。しかし、ビブリオバトルを通して、自分の好きな本を誰かに紹介する、という経験をし、司書の仕事の大切さや魅力を改めて感じたように思います。私はバトラーとして参加したのですが、緊張しながらも、少年たちの記憶に今日のことが少しでも残ってくれたらいいな、本をもっと読みたいという気持ちにつながればいいな、と思って

頑張りました。始まる前までは自分が紹介する本への反応がなかったらどうしよう、紹介する本が難しすぎるかな?、といろいろ悩みましたが、その悩みの後ろ側には、少年院に対する偏見のようなものがあったのではないかと思います。いま振り返るととても恥かしいことですが、司書になったら、自分自身が偏見を持っていた、ということを忘れずに、当たり前に本が読めない環境にいる人々にどのようなサービスを行ってあげばいいのか、を考えていきたいと思ひます」

「バトラーとして参加することになり、不安も感じつつも、当日はできるだけ元気に明るく、ふるまおうと思っていたのですが、ビブリオバトルを行う教室に向かう途中で、少年たちの号令の声が聞こえ、ふだんそうした大きな声を聴くことがないので、自分が考えているような「甘い」環境ではないことに背筋が伸びる思いでした。また、教室に入り少年たちの後ろ姿を見た時、彼らも緊張しているような空気を感じて、このなかで発表しても上手くいくのだろうか、と不安が再び襲ってきました。しかし、前に着席して、少年たちの顔を見ると、想像していたよりも普通の少年たち、子どもたちで、中学校の頃に戻ったような気持になったのを覚えています。発表中も、とても礼儀正しく、一所懸命話を聞いてくれて、積極的に反応や質問があって、私の番になるころには、無理に明るくしたり、元気にしたりしようとせずに、普通に友達に話しかけるようにすればいい、という気持ちになることができました。ただ、大勢の前で発表するというのは、私たちのような司書課程の大学生にとってもやはりとてもハードルが高いものだったので、もしこれからビブリオバトルを少年院で行っていくなら、好きな本を伝えるという楽しさを理解するためには、今回のようなイベント型のバトルをやる前に、ワークショップ型のビブリオバトルから始めるのがいいな、とも思ひました」

「竹下先生との事前学習では、それまで場所さえ知らなかった「少年院」について教えてもらい、矯正施設とは何かからはじまり、「犯罪少年」「触法少年」「ぐ犯少年」などの用語、全国と沖縄の違いを学んだ。初めて知ることや驚かされたことばかりだったが、その中でも、法律で書籍の閲覧が認められていることや「自弁書籍」という制度といった「少年達の読書状況」はとても勉強になり、話の中でライトノベルに触れられた時には、私の卒業論文の内容に近いこともあってとても興味深く面白かった。この事前学習を通して、竹下先生から、少年たちは読書好きであることは教わっていたが、少年院に来たときは不安もあった。しかし、ビブリオバトルが始まる前の松田先生のお話から、少年たちは本から学ぶ喜びを知っていること、他の先生方もビブリオバトルを楽しみにしていること、そして何より松田先生の読書愛を感じて、その不安はかなり軽くなった。ビブリオバトルを通して感じたことは、少年たちは本が好きな普通の少年であることと、自分の中ではないとは思っていた少年たちへの偏見があったことで、これらは、実体験しなければ絶対に感じる事が出来なかったものだろうと思ひ、とても価値のある経験をさせてもらったと考えている。特に、しっかりと発表を聞いてくれて、しっかりとメモを取っている姿勢は、これまで何度か手伝いをしてきたビブリオバトルの中でも1番と言えほどの積極性で、少年たちが、本当に本が好きであるが伝わってきて、とてもうれしくなった。そして、少年たちのふとした拍子に見せる、恥ずかしそうに笑う顔や年相応に喜んでいた様子を見て、彼らは普通のどこにでもいる少年たちで、だからこそなぜいま少年院にいるのか、本人だけではどうしようもない不条理な問題が世の中にはあることなども考えさせられた。今回感じたことは司書になっても、忘れずにずっと心にとどめておきたいと考えているし、少年たちから感じた読書熱に対して、やはり図書室の本は数が少ない印象も受けたので、地域の図書館によるアウ

トリーチサービスがいかに大事なのか身に染みて感じた。こうした学習の機会を与えてくださった少年院の先生方に心から感謝いたします」

多くの受講生が感想レポートの中に書いているように、または保護者の一部が今回の取り組みに不安を感じていたように、一般の人たちにとって、少年院の子どもたちの存在を肯定的に受け止めることはなかなか難しい部分がある。しかし、司書という専門職は、利用者の多様性に寄り添い、常に公正な姿勢で接することが求められると筆者は考えている。今回の取り組みを通して受講生たちは、少年院の子どもたちと「ビブリオバトル」という空間を共にし、院の子どもたちが抱えているものや感じていること、さらには、これまでどのような環境で育ってきたか、ということに思いを寄せることができたように思う。そしてそのことは、司書として、どのような利用者に対しても無意味な先入観や偏見をもつことなく、一人ひとりの利用者に接していくことの大切さを多くの受講生に実感を伴って伝えてくれたようにも感じている。

最後に、ビブリオバトルのデモンストレーションについて、筆者自身の感想をまとめておこう。

少年院という場所は確かに特別な空間であるが、だからこそ、切実に読書を求める子どもたちがいること、そして、読むこと・知ることが生きる上でとても大切なことだということ、読む権利・知る権利はどんな環境にある人であっても、基本的人権として保障されなければならないことを、今回のビブリオバトルのデモンストレーションを通して、私自身も深く学ぶことができた。この学びを受講生だけでなく、今後も司書を目指す学生たちに伝えて行きたいと考えている。

4. その後の取り組み

本稿で取り上げた少年院でのビブリオバトルのデモンストレーションの実施後も、沖縄国際大学司書課程と沖縄少年院とのかかわりは続いて

いる。2019年2月15日には、学生たちのデモンストレーションを見た院生による第1回ビブリオバトル大会が開催され、筆者はその講評者として招かれ、デモンストレーションにバトラーとしてかかわった学生の一部も見学者として少年院を再訪問し、投票にも参加させていただくこととなった。

院生によるビブリオバトル大会はその後、2019年5月、9月、2020年1月、2021年1月に開催されており、琉球大学教育学部で司書教諭課程を担当されている望月道浩先生とともに見学させていただいたこともある。また、ビブリオバトルの担当者が変わった際には、電子メール等で大会前にビブリオバトルの運営に関してのアドバイスを求められて、運営上の注意点、大会にのぞむこと、ビブリオバトルの教育効果などをレクチャーさせていただく関係も続いている。

本稿で取り上げたプロジェクトの舞台となった「図書館情報学特別演習Ⅰ」「図書館情報学特別演習Ⅱ」という科目は、残念ながら、2021年度より「学校司書のモデルカリキュラム」がスタートすることにより、科目数の調整によって閉講となったことでその役割を終えることとなった。コロナ禍で実習的な授業が制約されるとともに、今後もしばらくは続くだろう「新しい日常」の中で実習を継続することが難しくなったこともその理由の一つである。

しかしながら、本誌に取り組みを掲載するために改めて授業の実践を振り返る中で、コロナ禍であろうがなかろうが、司書を目指す学生たちの人生観や価値観のようなものを揺さぶる深い学びの体験は、多様性を尊重する専門職である司書にとって重要な体験だと気づかされることにもなった。

今後も沖縄少年院との関わりを大切にしながら、そうした学びの機会を確保できるよう努めていきたい。(2020年12月30日)

やまぐち しんや(沖縄国際大学)